

形に入って形から出でよ

形に入る

今回は技能学習を考えます。茶道や武道、書道などの稽古事では、よく行われていることがあります。そうです、形かたを覚えることです。ピアノやバイオリンの稽古にもあります。練習はまず、この形を身につけることから始めるのです。形は合理的にできています。長い歴史のなかでできてきたからでしょう、形には納得のいくものが多いのです。技を学ぶには、まず「形に入る」ことです。

先輩から、「これは形だから覚えなさい」、「学ぶ理由や形の意味が何かは考えないで、とにかく覚えなさい」、「文句をいうのは形を覚えたあとにしなさい」などと言われたことはありませんか。とくに若者は反感を抱くことでしょう。なぜなら、理屈に合わないことはやりたくないからです。初学者には苦痛な学習場面が予想されます。しかし、師匠や先輩がいう以上、形には魅力のある学習内容が含まれていると考えるほうが素直です。

さて、学習が進み、形が身についてくると、この形には限界があることに気づきます。一般に「方法論」は万能ではありません。「完全なる方法論」というものはないのです。方法論を学んだからといって、すべての問題に対して対応できると考えるのは幻想にすぎま

せん。いわば方法論の宿命ですね。ですから、私たちは従来の方法論で解決困難な場合には、発想を柔軟にして他の方法論を打ち立てることが求められるのです。

形を破る

いよいよ「形から出でよ」の時期が来ました。いまこそ形を破るのです。形は多くの学習者を導く大きな力となるものですが、必ずしも学習者一人ひとりに合うものとはかぎりません。自分自身の成長のためには、この殻から出なければなりません。試行錯誤と創意工夫の連続で、何かをつかみとります。この過程は試練の連続となります。

形は自分の技に磨きをかける力となるとともに、技の必須事項を網羅していたのでした。しかし、形は万能ではありません。自分自身の考え、動き方、あるべき姿と形がすっかりいなくなってきた場合は、逆に障害になるのです。これを越えることで、次の飛躍を手に入れることができます。越えられない場合、技はそこにとどまります。形は、初めは学習者の味方でしたが、やがて障害となり、越えるべき対象として姿を現すのです。

守破離の教え

これを一言でまとめた言葉に「しゅはり = 守破離」があります。

初めは技を守り、やがて技を破る。そして最終的には、技から離れるということを示しています。

もっと詳しくみてみましょう。初めは与えられた技をそのまま受けとめて、その内容を忠実に自分のものとします。そして一定の到達点に至るころ、技は急速に伸び悩み、限界を感じるようになります。

そのころから技を破って、別の技を考案したり、考え方を試行していくのです。この時期はとても苦しい時期といえましょう。葛藤と試練と精神的自立を図る時期です。

そしてついに、技から離れる時期がやってきます。かつての自分を支えてくれた技とは異なる考え方、動き方を編み出し、自分自身の技として確立するのです。技に流派があり、さまざまな分派、独立派が生まれるのは、ここに起因しています。

哲学の弁証法もこれと似ています。すでにある考えを「正」とし、別の考えを「反」として示す。そしてそこから「合」が生まれます。学問でも技でも同じですが、先輩や恩師は乗り越えるべき存在で、そのようにならないのは弟子が育っていないことを示しています。自分を超越する人材を育てることが指導者の使命なのです。自分を超越した人材を育てたときほど、指導者が輝くときはないのです。「形に入って形から出でよ」は、重い言葉として心に響きます。